

購買力平価

purchasing power parity

野上裕生

●お金の価値としての購買力

物の価値はその値段（それを
買うのに必要な貨幣額）で評価
されている。それでは全てのも
の価値の基準である貨幣の価
値はなんで測るのだろうか。p
円あれば財が一個買えることか
ら、一円では（1/p）個の財が
買えることになり、これが貨幣
価値を決める購買力になる。こ
の考え方を使得って、様々な異な
る貨幣の相対的価値を決めるた
めに考えられたのが「購買力平
価」（purchasing power parity
PPP）という概念である。これ
は「同じ購買力を持つ貨幣は同
じ価値を持つ」という考え方で
ある。よく取り上げられる例は
世界各国で食べられているハン
バーガーの値段で、日本で一五
〇円する一個のハンバーガーが
アメリカでは一ドルの値段だと
すれば、一五〇円の貨幣と一ド
ルの貨幣は同じ価値をもって交

換できる、ということになる。

●為替レートと購買力平価

この購買力平価は、元々は為
替レート決定理論として提案さ
れたものである。内外で消費さ
れている貿易財を考えると、内
外で価格が違っていれば消費者
は安いところで財を購入しよう
とするので（商品裁定）、内外
の価格が一致する水準で均衡す
ると考えられる。このような考
え方から長期的な為替レートの
水準を考えたのが購買力平価仮
説である（表の「基本公式」参
照）。為替レートは交換される
貨幣相互間の相対価値の比率で
あるから、貨幣の価値を購買力
で考えると、貨幣一単位当たり
の購買力の比率が長期的な為替
レートの水準だと考えられる。
実際の貿易取引では無数に多く
の財が取引されているから、あ
る一つの財の価格で購買力平価

が評価されることはなく、一般
物価水準を示す物価指数で購買
力平価が計測されることにな
る。

貨幣の価値を物価水準（の逆
数）で見た購買力で見るとい
う考え方はリカード以来の貨幣数
量説の伝統によるものだが、ケ
インズによれば為替レートの長
期均衡水準の説明で購買力平価
に注目したのはスウェーデンの
経済学者カッセル（G. Cassel）
である。しかしケインズ『貨幣
改革論』の分析でも購買力平価
がいつも成立するわけではない
ことは認識されていた。第一に
貿易には輸送費用などがかかる
ので厳密に内外の財価格が均等
になるわけではない。第二に、
物価指数には貿易できないサー
ビス等の非貿易財が含まれてい
るが、これに対して内外の価格
を均等にするとメカニズムは存在
しない。また自国と外国では
人々の嗜好が違うので物価指数
の構成要素も同じではない。そ
こで一般的に検証されるのは内
外の物価水準で見た購買力平価
と為替レートの間で安定した比
例的関係が示されるかどうか、
という相対的な意味での購買力
平価仮説である（「基本公式」
参照）。

●国際比較と購買力平価

経済統計の国際比較では円や
ドルといった複数の通貨で表示
されている指標を同じ単位の換
算しなくてはならない。一般に
現実の外国為替市場で成立して
いる為替レートによる換算より
も購買力平価で見た通貨換算率

基本公式

為替レートをe、自国での財の価格をp、外国での財の価格をp*とする。商品裁定が十分に行われた結果、自国の財を買っても外国の財を輸入しても値段が同じになり、以下の式が成立すると購買力平価説が成り立つことになる。

$$p = ep^* \qquad e = \frac{p}{p^*} = \frac{(1/p^*)}{(1/p)}$$

以上のような厳密な関係が成立しなくても、為替レートの変化率（自国通貨の減価率）と購買力平価（及び各国の物価水準）の変化（具体的にはインフレ率）の間で安定した以下のような関係が成立していれば、相対的には購買力平価説があてはまると考えられる。自国のインフレ率－外国のインフレ率＝自国通貨の減価率（為替レート変化率）

表 為替レート換算と購買力平価 (PPP) 換算のGDP (2007年)

HDI 順位	国名	人口 (100万人2007)	GDP (10億US \$)	GDP (10億PPPUS \$)	一人当たり GDP (1000US \$)	一人当たり GDP (1000PPPUS \$)
1	ノルウェー	4.7	388.4	251.6	82.6	53.5
2	オーストラリア	20.9	821.0	733.9	39.3	35.1
3	アイスランド	0.3	20.0	11.1	66.7	37
4	カナダ	32.9	1329.9	1180.9	40.4	35.9
5	アイルランド	4.4	259.0	194.8	58.9	44.3
6	オランダ	16.5	765.8	633.9	46.4	38.4
7	スウェーデン	9.2	454.3	335.8	49.4	36.5
8	フランス	61.7	2589.8	2078.0	42.0	33.7
9	スイス	7.5	424.4	307.0	56.6	40.9
10	日本	127.4	4384.3	4297.2	34.4	33.7
13	アメリカ	308.7	13751.4	13751.4	44.5	44.5
111	インドネシア	224.7	432.8	837.6	1.9	3.7
134	インド	1164.7	1176.9	3096.9	1.0	2.7
182	ニジェール	14.1	4.2	8.9	0.3	0.6

(出所) UNDP [2009] *Human Development Report 2009: Overcoming barriers: Human mobility and development*, Palgrave Macmillan, pp. 191-198の統計資料から筆者作成。一人当たりGDPはGDPを人口で割った値として計算した。

による方が先進国と途上国の所得や消費の格差は小さくなる傾向がある。たとえば非貿易財の価格は経済発展とともに上昇すると言われている。というのは、多くの製造業品のような貿易財

の方が労働生産性の上昇が大きく、労働生産性の上昇が労働者の賃金の上昇をもたらす、労働生産性の上昇があまり大きくなり非貿易財(たとえば理髪店などのサービス業で労働集約的な

もの)の価格が相対的に割高になるからである。仮にこのようなメカニズムが働くならば、先進国ほど物価水準は高くなるので先進国は名目所得で見るとは実質的な生活水準は高くないことになる。表は国連開発計画の『人間開発報告書二〇〇九』にある統計から購買力平価表示と為替レート換算のGDPを比較したものである。表は人間開発指数(HDI)の順位に従って並べてあるが、一般的に先進国では購買力平価表示のGDPが相対的に小さく、開発途上国では相対的に大きい傾向がある。たとえばノルウェーとインドの一人当たりGDPで見た経済格差は為替レート換算では八〇倍であるが、購買力平価表示では一九倍である。またアメリカは両方のGDPが等しくなっている。生活水準や経済規模の国際比較では、購買力平価表示と為替レート換算の統計は、おおまかな動きは同じ傾向を示すとしても、為替レート換算のGDPを比較すると先進国と途上国の経済的格差を過大評価してしまう可能性はある。

実際に購買力平価を推計し、国際比較可能な統計を整備するのは大変な作業で、国際機関が

担当している。諸国間で同一の品質を持つ商品がないので購買力の比較ができない、等々、国際比較には難しい問題があるからである。表に示された統計もICD(International Comparison Program)と呼ばれる長年の試行錯誤の作業によって得られたもので、このような地道な統計作業にも注目が集まることを希望したい。

(のがみ ひろき/アジア経済研究所開発研究センター)

■参考文献
 本文の説明は西川俊作編「一九九五」『経済学とファイナンス』東洋経済新報社、三七〇ページ、作間逸雄編「二〇〇三」『SNAがわかる経済統計学』有斐閣、一八一―一八三ページを参考にした。購買力平価による戦間期為替レートのケインズによる分析はKeynes, John Maynard [1971] *A Tract on Monetary Reform*, London and Basingstoke: Macmillan (原著は一九二三)。統計の国際比較と購買力平価の関係については溝口敏行「一九九二」『我が国統計調査の現代的課題』岩波書店、一二七―一三六ページを参照した。